

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 21 日現在

機関番号：34526

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2015～2016

課題番号：15H06781

研究課題名（和文）独居認知症高齢者のアセスメントツールの開発と妥当性・有用性の検討

研究課題名（英文）The development of the assessment tool about the continuation of the staying alone life of elderly people with dementia and examination of reliability, the validity

研究代表者

久保田 真美（Kubota, Mami）

関西国際大学・保健医療学部・助教

研究者番号：60759752

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：認知症高齢者の独居生活におけるアセスメントツールの開発を目指して、多職種にインタビューを行い、質問紙の作成を試みた。当初は、項目の枠組みとして、「認知症のレベル」「近隣トラブル」「健康管理」「安全の確保」であったが、「本人のQOL」や「生活満足度」も測定していく必要性が導き出された。認知症が進行すると、判断力も低下し意思決定も難しくなるなかで、本人のQOLや生活の満足度も考え、本人の尊厳を支える視点が必要である。

研究成果の概要（英文）：We interviewed the many types of job about the staying alone life of elderly people with dementia. We regarded "progression of dementia level" "trouble with residential neighborhoods" "health care" "securing of security" as a necessary matter before interviewing you, but a viewpoint to support dignity is necessary after judgement decreasing when the need of what the "quality of life of the person" "life satisfaction" measures was able to arrive, and dementia progresses, and the decision making becoming difficult, and having thought about the satisfaction of quality of life and the life of the person.

研究分野：在宅看護

キーワード：認知症 独居高齢者 生活満足度 アセスメントツール

1. 研究開始当初の背景

近年、認知症高齢者の著しい増加、独居の高齢者の増加、さらに認知症発生率が高い後期高齢者人口が増加していることから、独居の認知症高齢者数は急増し続けていることが予測される。厚生労働省の認知症施策では、「認知症になっても住み慣れた地域での生活を支援し、なじみの人間関係の中で生活を継続する支援」を提唱している。独居生活者においても、公的なサービスを利用し、地域の住民や家族の力を借りながら、住み慣れた地域で生活し続けることが望ましいと考えられる。しかし、同居者がいない認知症者が人生の最期まで自宅で生活することは、認知症の症状の進行や BPSD(行動・心理症状)の出現から考えると不可能とも考えられ、行方不明なったり、自己に巻き込まれたりするケースは数多く報告されている。

研究者は、修士課程に在籍しているときに、独居認知症高齢者の体験を明らかにするために、本人と担当の介護支援専門員にインタビューをした。認知症高齢者は、自分が認知症であることやその症状を自覚しており、「しっかりしよう」という思いで生活に工夫を入れていた。そして今後も独居生活を続けたいという強い意思を示した。しかし、その一方で、担当介護支援専門員は、健康管理や安全面において危機感を感じており、「車を何回もぶつけているがなかなか運転をやめない」「何度も鍋を焦がしているが火を使っている」と具体的に訴える者もいた。

また、研究者は、訪問看護師として勤務していた際、独居の認知症高齢者が体調管理をできず、緊急入院になるケースや夜間徘徊して大騒ぎになる場面も目の当りにしてきた。担当の介護支援専門員や訪問介護職、訪問看護師などそれぞれの職種の者が「もう限界だ」「いや本人は独居生活を望んでいる」と意見を交わすが、共通のスケールなどはなく、方向性の定まらないケースが多々あった。多職種が共通認識のもとで、困難な場面をアセスメントするためのツールや、限界の時期を見極めるための指標が必要であることを感じた。

これまでに研究者は、認知症高齢者の独居生活の限界に至る過程について研究をした。その結果、限界に至る要因は体調管理などの本人のみの問題だけではなく、近所からの苦情や警察沙汰になることなどで、サービス提供者や別居家族の疲弊などが影響していることが明らかになった。本人は施設入所を希望していないが、半強制的に入所させられてしまっている実態や施設入所してからの本人は徐々に落ち着いて、馴染んでいくことも明らかになった。今後は、本人の希望通り、ぎりぎりの時まで独居生活を支援していく方法の確立や限界の時期を的確に見極めて、なおかつ本人の混乱を最小限にして、入所に移行するための支援方法を考えていくための1資料になると考えた。

2. 研究の目的

研究目的は、認知症高齢者を支援するための「独居生活の限界指標を含めたアセスメントツール」を開発することであり、さらにその妥当性・有用性について検討することである。本研究で、現場での活用可能なアセスメントツールを開発することにより、「困難場面での介入についてアセスメントやケアの方法」「認知症高齢者がこれ以上独居生活を継続すると安全確保が困難であるという指標」の獲得が可能になる。

本研究の意義は、認知症高齢者の意思を尊重しつつ、彼らの安全を守ることであると同時に、常に心配をしていた家族や支援者達が、事故や事件のあとにショックを受けて自らを責め続けるという事態を予防することにもつながると考えた。

3. 研究の方法

アセスメントツール開発に向けて質問紙作成の準備段階において以下の方法を実施した。

(1) 文献検討

文献は、医学中央雑誌 WEB、CiNii のデータベースを用いて検索した。独居(一人暮らし)/認知症/高齢者/在宅生活/継続要因/限界の単語の掛け合わせで、2000年から現在に至るまでの文献を抽出し、会議録は除いた。同時に、「認知症」や「一人暮らし高齢者」について取り上げている専門書や雑誌の記事も探索した。

抽出した文献から、独居生活を継続するための要因、認知症高齢者の独居生活を支えていくうえでの支援の困難性などを検討した。

(2) 多職種へのインタビュー

インタビューの対象者は、独居認知症高齢者の担当を10例以上経験したことのある訪問介護、訪問看護、介護支援専門員、それぞれ6~10名である。対象の選出は、訪問介護事業所、居宅介護支援事業所、訪問看護ステーションの管理者に研究の趣旨や目的、対象者の条件を伝え、対象となる職員がいた場合は紹介を依頼した。対象の職員に研究の趣旨や目的、倫理的配慮、インタビューの方法と質問内容などについて、書面をもって説明をし、同意を得られた場合は同意書に署名を得た。インタビューは、事業所内の個室で行い、時間は40~60分、インタビュー内容は、「独居認知症高齢者の支援で、困難に感じた場面」「『この人はもう限界だな』」と感じたときの本人の状況・周囲の状況」「独居の高齢者が自宅で最期を迎えることを可能にする要因」である。

倫理的配慮として、対象者に研究の概要、目的、インタビューの協力は自由意思に基づくものであること、いつでも取り消しが可能であり、辞退しても不利益がないこと、個人情報機密性の厳守などについて書面と口頭で説明を行い、同意書に説明を得た。イン

インタビューの前に IC レコーダーの録音やノートに記録をしてもよいかを尋ね、同意を得た場合は録音をした。音声データは、逐語録の作成後にすべて消去した。

4. 研究成果

(1) 文献検討の結果

認知症のない高齢者の場合、独居生活を継続するには、「本人の意思や意欲」「病状や精神状態が安定すること」「経済的な安定」「家族や地域の理解と支援体制」「食事摂取」「療養環境の維持」などが必要である。そして、継続が不可能になる要因は、「疾病の悪化」「転倒などによるけが」「認知症による生活機能の低下」「その他の要因による生活機能低下」であった。

独居認知症高齢者の支援での困難性は、「衛生状態の悪化」「近隣とのトラブル」「援助の拒否」「火の不始末」「金銭管理ができなくなる」「夜間の徘徊」等である。

2) 多職種へのインタビュー

他職種へのインタビューの結果、独居の認知症高齢者の支援の困難性は「本人の必要性を理解できずにサービスを拒否」「不在時に何が起きているのか事実が不明」「内服管理などの健康に維持困難」「他者との関係性の不和」「キーパーソンと連絡がつかない」「公的なサービスのみでは支援が不十分」などであった。

認知症高齢者の独居生活を支援していくことに限界を感じた時の本人の状況は「火の不始末などが続く」「夜間の不可解な行動や社会的ルールが守れずに近隣とトラブルをおこす」「健康管理をしていくうえで、公的支援では不十分（経済的余裕もない）」「QOLの低下（尊厳の保持ができていない）」などであった。

認知症高齢者の独居生活を支援していくことに限界を感じた時の周囲の状況は、「近隣者が迷惑を訴える」「警察や救急隊などから、『なんとかしてくれ』と言われる」「家族と連絡がつながりにくくなる」「サービス提供者たちが疲弊」などであった。

インタビューの結果から、想定外だったのが、「(本人の) QOL の低下」であり、生データとして「下着姿で部屋の中を歩いている姿や、失禁しても処理できていない状態では生活の質が維持できているとは思えない」「壁に向かってぶつぶつ言ってるような姿をみると安全が保てていても、本人の尊厳はどこにあるのだろうかと思う」という意見であった。認知症になると判断力が低下すると同時に意思表示することも困難になる。今現在、「自分が望んでいた生活を維持できているのか」という視点も必要であり、尊厳の保持は課題であると示唆を得た。そのため、「認知症高齢者の尊厳を支えるケア」についての概念を捉える必要があると考え追加した。

3) 概念分析(認知症高齢者の尊厳)

医中誌 Web を使用してキーワードを認知症 / 高齢者 / 尊厳で掛け合わせて「会議録を除く」「原著論文」「抄録あり」に限定して、57 件がヒットし、そのうちの 18 件、ハンドサーチの 5 件を含めて 22 件の文献を対象とした。分析はロジャーズの手法でおこなった。その結果、認知症高齢者の尊厳を支えるケアについて、以下のように定義する。

認知症高齢者は、その疾患の【複雑多様な症状】【意思疎通障害】が生じる。ケア提供者は【対応困難感とネガティブ感情】を抱き、【理解不足から不適切なケア】を行ってしまい、本人は自分自身の内面の変化を自覚しており、【不安の増強と自尊心の低下】が生じる。さらに日々のコミュニケーションがうまくいかず【周囲からの孤立感】を感じてしまう。今までの人生や高齢期を生きているという【高齢者への敬意】をもち、個別性を重視したうえで【その人らしさを支援】していくことや本人の【QOL の向上】につとめること、その人それぞれに合わせた【多様なコミュニケーション】が必要となってくる。そのようなケアが実施されることにより、認知症高齢者は症状が進行しても【穏やかで安心できる生活】をおくることや周囲から大切にされていることを感じることで【自尊感情の維持】につながる。たとえ、言語的なコミュニケーションが不可能になっても、聴力や感情など【残存能力が維持】できていることを周囲が理解して活用することで【他者との情緒的交流】を保つことも可能になる。

今後は、1) ~ 3) の成果をもとにして、質問紙を作成していく方向である。

引用文献

厚生労働省：認知症施策推進総合戦略～認知症高齢者にやさしい地域づくりにむけて～

齋藤智子、佐藤由美：介護支援専門員のケアマネジメントにおける対応困難の実態、千葉看護会誌、12(2) 8-14 (2006)

二宮佐和子：処遇困難な在宅高齢者のケアコーディネーション、大阪府立大学看護学紀要、12(1) 115-120 (2006)

小倉千恵子、近藤あゆこ、杉本左栄子、ほか：行政と在宅介護支援センターが関与した高齢者の処遇困難事例の実態、日本看護学会地域、36, 108-110 (2005)

菊池和則、伊集院睦雄、栗田主一、ほか：認知症の徘徊による行方不明の実態調査、老年精神医学雑誌、第 27 巻 3 号 323-332 (2016)

柄澤邦江、稲吉久美子：独居高齢者における独居を継続できなくなった要因に関する研究、飯田女子短期大学紀要、Vol. 25. 21-33 (2016)

關優美子、森山恵美、釜屋洋子、ほか：一人暮らしの在宅療養者が生活を継続でき

る要因 - 訪問看護ステーションの調査を通して - ,日本看護福祉学会誌 ,Vol .20 ,
No2 , 297-307 (2014)
江尻真由美, 満保紀子: 独居高齢者の自宅退院を可能にする因子の検討 . みんなの理学療法 , 第 23 巻 ,61 - 63 (2004)
佐藤雅彦: 認知症になった私が伝えたいこと , 大月書店 , 東京 (2015)
鈴木恵子, 北後明彦, 室崎益輝ほか: 一人暮らし高齢者の住宅火災危険要因に関する考察 - 東京都内における訪問調査を通して - . 日本建築学技術報告集 , 第 16 巻 32 号 179-184 (2010)
蒔田寛子, 川村佐和子: 訪問看護を利用している高齢独居療養者の生活継続に必要な機能の分析 . バイオフィリア リハビリテーション研究 (7) 7-17 (2011)
瀬戸大輔: 日々の生活に不安を抱えている認知症高齢者への支援 - 尊厳を支えるケアの実践を目指して - . 東北介護福祉研究 16 号 75-78 (2013)
木下香織, 中島望: ケアスタッフの認知症高齢者への対応困難感と自我状態の認識は対人交流に与える影響 , 日本認知症ケア学会誌 12 巻 2 号 , 367-375 (2013)

5 . 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 1 件)

久保田真美, 独居認知症高齢者のケアと家族支援, 臨床老年看護 . Vol .24、 2017、 76-82

[学会発表] (計 1 件)

久保田真美, 独居認知症高齢者の訪問における困難と工夫点 ~ 訪問介護職へのインタビューを通して ~ , 第 24 回日本介護福祉学会大会, P112 , 2016 , 上田市

6 . 研究組織

(1) 研究代表者

久保田 真美 (KUBOTA MAMI)

関西国際大学・保健医療学部・助教

研究者番号 : 60759752